



葉桜となり、若葉が芽吹き始める時期となりました。テントウムシやモンシロチョウなど虫たちが活発に動き始め、近くの公園では、元気に走り回っている子どもたちの様子が見られるようになりました。高砂市内の保育施設では、コロナ禍で縮小されていた行事も徐々に通常へともどり、マスクを外した子どもたちのかわいい笑顔が見えはじめました。

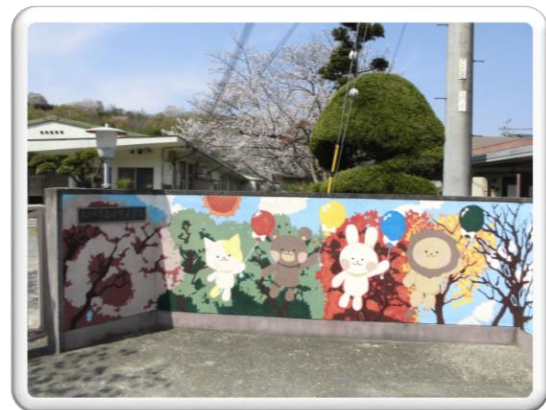
今年度も保育コンシェルジュ2人が、高砂市内の教育・保育施設取材し、子育て情報を発信していきたいと思います。



高砂市役所2階の幼児保育課窓口に来られる方の中で、「そろそろ入園を考えているけれど、子どものことで心配なことがあって…」や「乳幼児健診で言葉の遅れがあるとと言われて…」等の相談を受けることがあります。そんな時には、お子様の状況をお伺いし、お子様と保護者の方にとってより良い環境を一緒に考えていきます。また、児童学園（親子教室）にご案内させて頂く事もあります。この度、児童学園の先生から「園庭のさくらがきれいに咲いているよ」とお聞きし、みなさんにもぜひ見て頂けたらと思い、取材を兼ねて撮影に行ってきました。たくさんある桜の中でも園庭の大木の桜が特に見事でした。

阿弥陀町にある高砂市立高砂児童学園は、言語・知的面に支援の必要な子どもたちを対象とし、保育等を行う施設です。また、児童発達支援センターの役割も担っており、理学療法士等の専門的な指導や心理士等による発達相談、体験型の親子教室などを行っています。

児童学園は、阿弥陀町の大自然の中にあり、春は桜、夏は新緑、秋は紅葉と四季が感じられる園庭や広いプールが魅力です。現在、児童学園には 2 才児から 5 才児まで全 18 名の児童が通っています。入園すると、子どもたちは園のバスに乗って通園します。最寄りのバス停でうちのひとと別れてバスで通園することは子どもたちにとって貴重な経験と成長につながりますね。また、バス停で見送る保護者の方々には園での様子を連絡帳でお知らせをしています。毎月保護者会も実施しているのでお子様の様子を知ることができるので安心ですね。そして園のバスは、稲刈り、芋ほりなど楽しい遠足でも大活躍です！



園舎を見学していると、保育室からピアノに合わせて元気な歌声が聞こえてきました。覗いてみると、歌詞に合わせて両手でかわいいお花をつくり体を揺らして楽しそうに歌っている姿がありました。歌は、子どもたちの大好きな園歌でした。お部屋での活動が終わると、広い園庭で三輪車や自転車に乗ったり、総合遊具や砂場で遊んだりとおもしろいおもしろい楽しんでいました。日差しを身体いっぱい浴びながら、楽しそうに園庭を走り回るイキイキとした子どもたちの姿が印象的でした。

「お部屋に入ろうね」と言う先生の言葉かけで遊んでいた遊具を片付け始める子どもや、もっと遊んでいたくて「いやー」と意思表示している子どもも先生に促されて一緒に片付けをして保育室に入って行きました。

たくさん遊んだ後は、おいしい給食の時間です。今日のメニューはかつめし、豆腐の味噌汁、牛乳、デザートにパンケーキと美味しそうな給食に、子どもたちは“待ちきれない”という様子でした。給食は、3人の調理師さんが個別対応で作っています。咀嚼が苦手な子どもには刻み食にしたり、固い食べ物が苦手な子どもには、食感を柔らかく仕上げたり、白ご飯が苦手な子どもには、ふりかけや、味付け海苔などで工夫されていました。ご飯は園で炊き立てを提供し、食パンも園で手作りしているそうです。

ホームページには、行事を楽しむ子ども達の様子が掲載されていますのでご覧ください。



園長先生にインタビュー

★児童学園の魅力を教えてください。

「児童学園は、市内の幼稚園、保育園、こども園との交流保育や、併設している“あすなろ学園”の皆さんと合同避難訓練など、地域の方との交流を大切にしています。

子どもたちの笑顔は、先生達の元気の源になっています。泣くことも感情表現の1つなので、なぜ泣いているのか、何がしたいのか、どんな遊びが好きなのか等、子どもたちの気持ちをくみとってあげられたときは、とても嬉しくなります。クラスは1歳～5歳の混合で構成し、お互いに良い刺激を与えあいながら、共に成長しています。」

★給食の人気メニューを教えてください。

「お魚メニューです。みんな和食が大好きです。」



保護者の方からは「少人数のクラスでみてもらえるので、子どもと先生の関わりが深く、本人が楽しそうにしています。」「丁寧に対応していただけて、嬉しいです。」「入所してから、ぐんと子どもが成長しました。」という声があるそうです。

児童学園で過ごす日々は、先生と一緒にコツコツと、小さなことから少しずつ「できた!」ということが増えていく大事な時間だと思います。そして、児童学園での経験は、これからの人生の生活の基盤となり、未来へと繋がっているのだと感じました。

